



医師会の 立ち上がり

兵庫県医師会災害対策本部
会員・医療機関の被災状況

兵庫県医師会災害対策本部

兵庫県医師会の初動活動

兵庫県医師会災害対策本部の活動並びに日医・近医連・郡市(区)医師会災害対策本部との連携

1. 震災当日(1月17日)

交通機関途絶等により、県医師会館へようやく職員(2名)が到着したのは午前9時30分であった。

早速、会館の損害状況を点検した結果、建物内部では書庫等倒壊により書類が散逸していたが、幸い建物には損傷はみられなかった。

この旨を瀬尾会長に連絡し、即時の対応につき指示を受けたが、電話等不通のため状況把握等が困難なこともあり大混乱のうちに終止した。

2. 災害対策本部の設置

翌日(1月18日)は職員4名が出動してきたが、事務局体制不備の状況のもと地震の規模からして被災地区にあっては被害は甚大なものであろうと判断し、「事態の速やかな掌握並びに迅速な救急医療体制の整備が必要である」として瀬尾会長を本部長とする『兵庫県医師会災害対策本部』を設置した。



兵庫県災害対策本部の構成員

本部長	瀬尾会長
副本部長	石戸、橋本、加古三副会長
主務本部委員	西村庶務担当常任理事
本部委員	岡田、水野、前田、永井、瀧谷各常任理事
	田中、古橋、平林、横山、飯尾、大谷、 富永、梶川、山本、白倉、武田、栗原、 岡本、若森、大隈、大橋各理事
	荒尾、正田、中山各監事
幹事	山下事務局長

3. 災害対策本部会議の開催

本会理事会をもって災害対策本部会議とし毎週1回開催し、被災状況の把握、緊急時における救援・救護活動及び今後の復旧・復興対策等について種々協議した。

4. 災害対策本部の初動活動

震災直後から約1カ月の間県医師会は24時間体制をとって対策本部員と緊急時の対応を行った。

また、県行政等とその都度緊密なる連携をはかり次の緊急時初動活動にあたった。

①心配される本会役・職員並びに被災地区医療機関・医師会の被害状況について電話並びにFAXにより情報収集を行った。

しかし、通信網の破壊等により連絡がとれない状況であり、この確認に以後数日を要した。

②マスコミ並びに住民からの昼夜を問わない受診可能な医療機関等の情報提供照会に対し、調査を行う等、できる限りの提供を行った。

この受診可能医療機関調査についても通信不能の地区が多く、状況把握に以後数日を要した。

③全国より医師・看護婦派遣並びに医師個人からボランティア申し出の多数入電を受け、兵庫県及び被災各市町災害対策本部へ仲介した。

- ④医薬品等救援物資の申し出が全国医師会等より多数入電され、物資集積の一元化を図るべく兵庫県救援物資受入先である「兵庫県消防学校」に送付されるようその都度連絡をとった。
- ⑤県下郡市（区）医師会に対し、医師、看護婦等及び医薬品・器材等応需状況について回答方を依頼した。
- ⑥各避難所における診療体制の確保について被災地区医師会長に対し依頼した。また県知事の依頼により、県の設置する避難所救護センターの医療担当責任者に医師会長が就任するよう要請した。
- ⑦医療機関の倒壊等による入院患者の転院について近医連災害対策本部よりの通知に併せて本対策本部としての対応方につき被災地区医師会長に通知した。
- ⑧救急、検死活動等に関し、日本医師会並びに郡市医師会、更には兵庫県災害対策本部（兵庫県）等から、続々入電があり、その都度郡市（区）医師会を始め関係各団体に対し指示依頼等の連絡を行った。
- ⑨震災に伴う被災者の保険診療並びに労災保険・公害医療の取扱いについて郡市（区）医師会を通じ会員に通知した。
- ⑩瀬尾会長を始め本会役員が随時被災地区医療機関並びに避難所等を見舞い、激励した。

5. 日本医師会「兵庫県南部地震災害対策本部」の設置

- 1月18日、日本医師会においても村瀬日医会長を本部長とする災害対策本部が設置され、中央折衝、全国医師会に対する「救援医療チーム」の編成及び義援金の募集等々本会災害対策本部支援活動が展開された。
- 1月20日、大阪市において開催された近医連常任委員会に村瀬会長が来阪。被災地区視察を強く希望されたが、交通網途絶等の現状から、已むを得ず中止願った。
- 1月26日～27日の2日間に亘り、村瀬会長、石川常任理事、広岡課長・鈴木課長が来県、神戸市内並びに阪神間の被災地区視察を行うとともに、県知事、神戸、芦屋、西宮各市長と面談し、救援・救護活動等当面する諸問題につき協議が行われた。
- 2月25日、石川、本吉常任理事が芦屋市医師会を訪問、被災地区医師会長と、引き続き石川常任理事が神戸市医師会を訪問、神戸市並びに各区医師会代表と、救護所、ボランティア医師等の撤退について懇談を行った。
- 2月26日、石川常任理事が前日に引き続き、北淡町を訪問し、同町長並びに幹部職員と懇談した。
- この他にも日医役員多数の来県をみ、激励を受けた。

6. 近畿医師会連合対策本部の設置

1月20日、近医連常任委員会の了承を得て植松大阪府医師会長を本部長とする近畿医師会連合災害対策本部が大阪府医師会館内に設置された。

本会災害対策本部諸活動を強力に支援すべく、救援物資の受入、医薬品の提供、患者の移送等の活動が実施された。

7. 厚生省「現地災害対策本部」の設置

1月22日、国立神戸病院（神戸市須磨区）内に、厚生省により現地災害対策本部が設置され、ここを拠点として、県等行政並びに本会災害対策本部との緊密な連携を図り諸活動が展開された。



2 会員医療機関の被災状況

1 郡市区別被害

被災地区における家屋被害につき地区全体並びに医療機関の全壊（焼）、半壊（焼）状況は次の表のとおりであった。

これをみると、激震地区であった神戸市東灘区、灘区、中央区、兵庫区、長田区、須磨区、芦屋市の医療機関では、地区全体の被災率に比してもかなりの高率となっており、その被害が甚大であったことが分かる。

2 被災会員アンケート

本会では震災直後、被災会員に対しアンケート調査を実施した。

この調査では、被災会員に対し被災状況を問うとともに「診療所の再開、復興」並びに「当面の希望」を聞いた。

診療所の再開、復興について回答者119名中「意志がある者」105名（同じ場所で96名、同じ医師会内の別の場所で8名、県内の他医師会内で1名）、「意志がない者」14名（勤務医になる3名、廃業する10名、その他1名）であった。

当面の希望について「勤務先を斡旋してほしい」3名、「再開するまで当分アルバイト先を斡旋してほしい」11名、「再開のための融資の世話をしてほしい」53名、「その他」

家屋（全体・医療機関）被害状況

	家 屋（全 体）						医 療 機 関					
	全 壊（焼）			半 壊（焼）			全 壊（焼）			半 壊（焼）		
	a被災棟数	b地区全体棟数	被災率(a/b)	a被災棟数	b地区全体棟数	被災率(a/b)	a被災棟数	b地区全体数	被災率(a/b)	a被災棟数	b地区全体数	被災率(a/b)
			%			%			%			%
神戸市	74,396	535,466	(13.9)	55,486	535,466	(10.4)	291	1,436	(20.3)	288	1,436	(20.1)
東灘区	14,021	65,483	(21.4)	5,571	65,483	(8.5)	52	195	(26.7)	39	195	(20.0)
灘 区	13,223	45,150	(29.3)	5,770	45,150	(12.8)	56	167	(33.5)	44	167	(26.3)
中央区	6,411	46,838	(13.7)	6,680	46,838	(14.3)	53	253	(20.9)	75	253	(29.6)
兵庫区	10,473	44,467	(23.6)	8,170	44,467	(18.4)	41	171	(24.0)	51	171	(29.8)
北 区	272	78,987	(0.3)	3,142	78,987	(4.0)	1	122	(0.8)	4	122	(3.3)
長田区	20,280	48,898	(41.5)	8,356	48,898	(17.1)	60	162	(37.0)	41	162	(25.3)
須磨区	8,103	56,411	(14.4)	5,637	56,411	(10.0)	23	123	(18.7)	18	123	(14.6)
垂水区	1,177	72,200	(1.6)	8,897	72,200	(12.3)	4	153	(2.6)	15	153	(9.8)
西 区	436	77,032	(0.6)	3,263	77,032	(4.2)	1	90	(1.1)	1	90	(1.1)
尼崎市	4,888	155,808	(3.1)	25,520	155,808	(16.4)	0	460	(0)	4	460	(0.9)
伊丹市	1,370	46,871	(2.9)	7,200	46,871	(15.4)	1	123	(0.8)	3	123	(2.4)
川西市	536	48,346	(1.1)	2,583	48,346	(5.3)	0	91	(0)	3	91	(3.3)
宝塚市	1,341	50,815	(2.6)	3,718	50,815	(7.3)	1	125	(0.8)	5	125	(4.0)
西宮市	19,550	90,880	(21.5)	16,302	90,880	(17.9)	26	379	(6.9)	63	379	(16.6)
芦屋市	4,672	27,331	(17.1)	3,944	27,331	(14.4)	13	90	(14.4)	20	90	(22.2)
明石市	2,210	87,165	(2.5)	3,380	87,165	(3.8)	3	195	(1.5)	17	195	(8.7)
洲本市	17	32,732	(0.1)	655	32,732	(2.0)	0	43	(0)	1	43	(2.3)
津名郡	3,211	56,644	(5.7)	4,228	56,644	(7.5)	1	41	(2.4)	5	41	(12.2)
合 計	112,191	1,132,058	(9.9)	123,016	1,132,058	(10.9)	336	2,983	(11.3)	409	2,983	(13.7)

家屋（全体）：地区全体棟数 神戸市＝平成7年1月段階の棟数（神戸市固定資産税課調）

：その他の地区＝平成5年兵庫県統計書（課税対象棟数）より

医療機関：地区全体数 平成6年12月末現在医療機関数

1名の回答を得た。

この調査結果を受け、本会復旧・復興の重点事業として『被災会員に対する融資等救済措置の設置等』を行政並びに金融機関に対して強力に働きかけた。

図1 診療所の被害状況

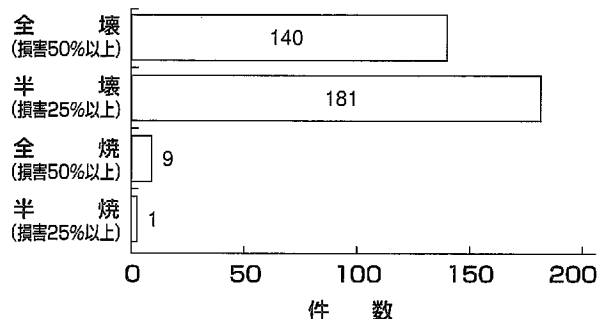


図2 現在の診療程度

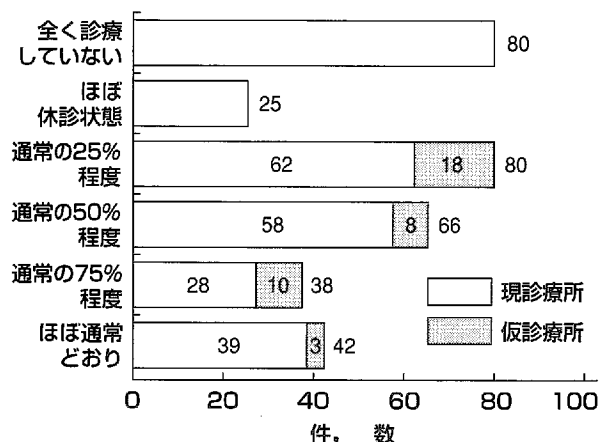
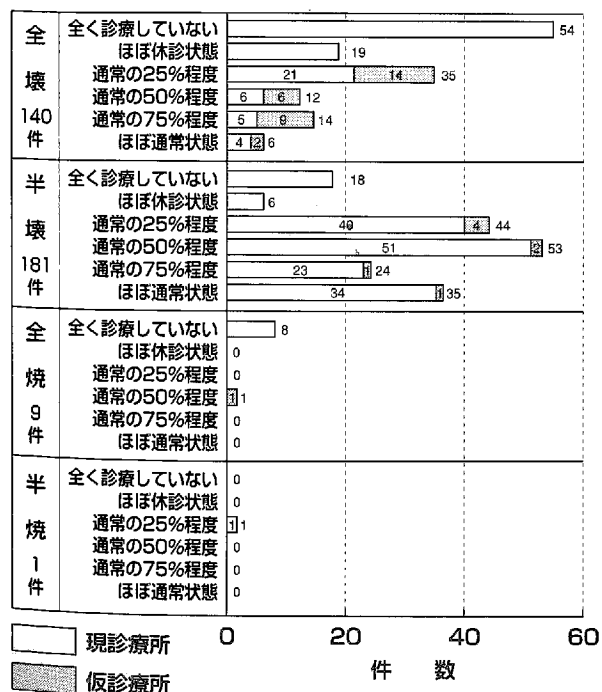


図3 診療所の被害状況・診療程度



また、勤務先、アルバイト先の斡旋を希望する会員に対して医師受入可能医療機関を調査の上、双方の仲介を積極的に実施した。

図4 診療所の再開、復興

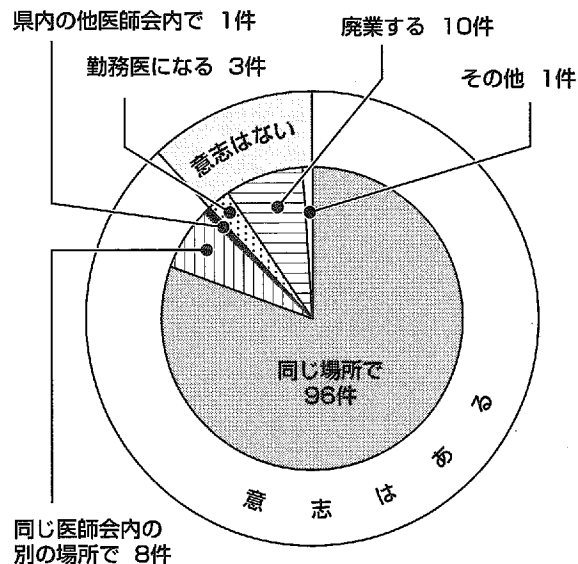


図5 当面の希望

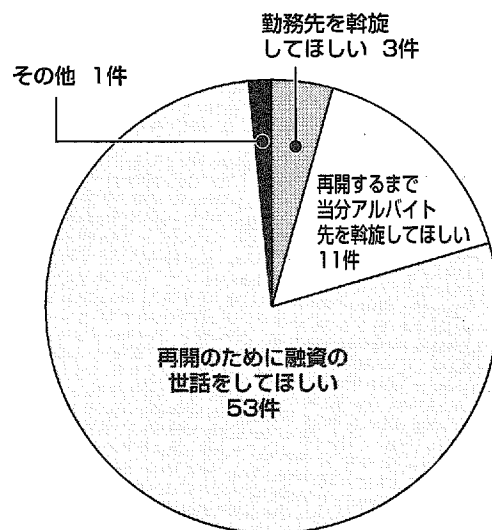
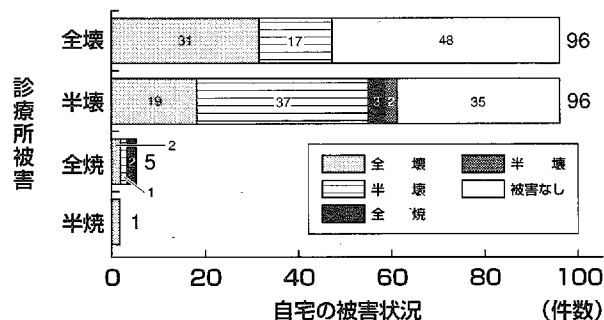


図6 診療所とは別に自宅が有る場合の自宅の被害状況



3 人的被害

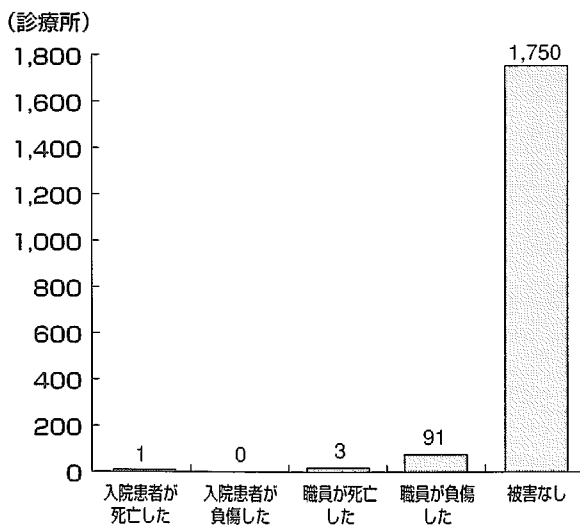
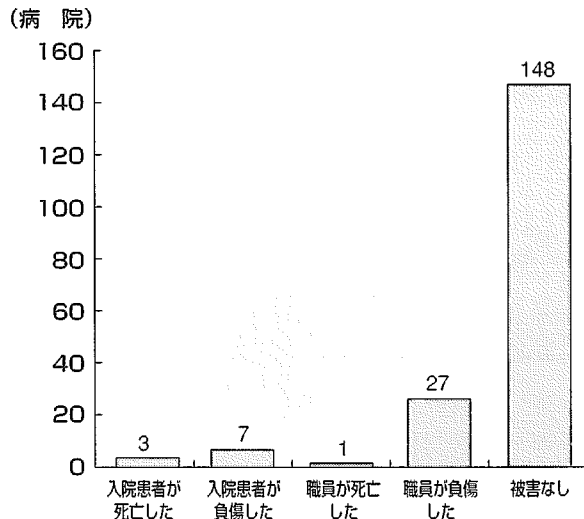
(病院)

震災日から3日間の院内での人的被害では、回答した182病院のうち「被害なし」148病院、被害を受けた病院では「入院患者が死亡した」3病院、「入院患者が負傷した」7病院、「職員が死亡した」1病院、「職員が負傷した」27病院であった。

(診療所)

回答した1,845診療所のうち「被害なし」が1,750診療所、被害を受けた診療所では「入院患者が死亡した」1診療所、「職員が死亡した」3診療所、「職員が負傷した」91診療所であった。

人的被害（震災日から3日間）



兵庫県、災害医療についての実態調査結果（平成7年6月）より

4 施設・設備の被害

(病院)

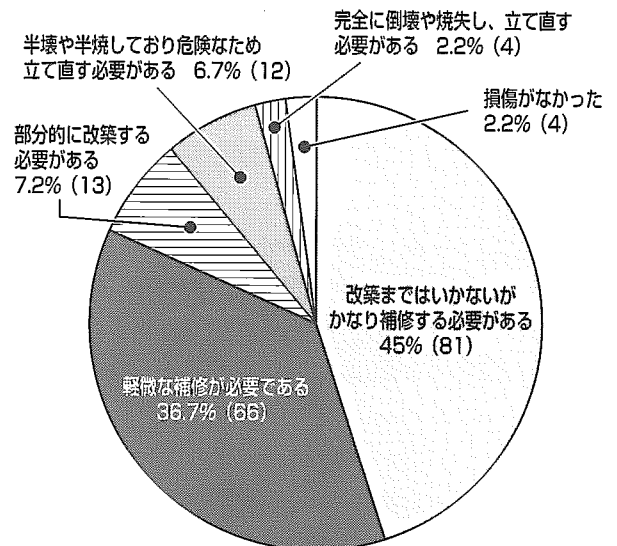
回答した180病院のうち損傷がなかった、軽微な補修が必要と回答があったのは、70病院（38.9%）であり、6割以上の病院が施設・設備にかなりの補修を要するか、それ以上（部分改築・全面改築）の被害を受けた。

(診療所)

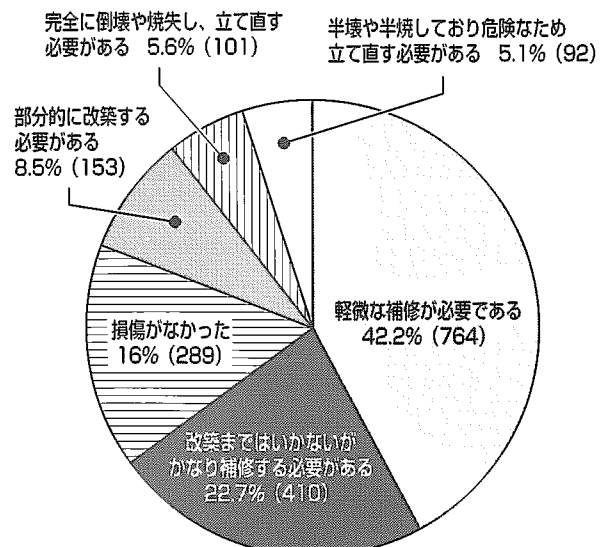
回答した1,809診療所のうち、約4割の診療所が施設・設備にかなりの補修を要するか、それ以上（部分改築・全面改築）の被害を受けた。

施設・設備等の被害

(病院)



(診療所)



兵庫県、災害医療についての実態調査結果（平成7年6月）より

1. このたびの阪神大震災は、わが兵庫県に未曾有の激しい損害を与えました。物故者は5,000人を越え、行方不明約160、負傷者約25,000という人的損害はもとより、物的にも市民の生活環境は完全に破壊され、ほとんどの都市機能は喪失してしまいました。尊い犠牲者の霊に心から哀悼の念を捧げます。兵庫県医師会においても物故会員は10名を数え、病院の全壊または全焼5、診療所に至ってはいまだにその数を確定できませんが、(被害の最も激しかった灘、長田では調査不能)少なくとも300から500に上るという、医師会の歴史にもかつて見ない大惨事となるに至りました。

2. 率直に言って、台風や交通災害などに対する医師会の救急体制は平素から整備されていましたが、今回の震災は、医師会員自体が大きな被害を蒙り、通信、交通の途絶と相俟って医師会としての機能は、ほとんど壊滅の状態に陥りました。

3. 震災の翌朝(18日)ようやく兵庫県医師会災害対策本部を兵庫県医師会館に設置し、日本医師会とも連絡をとって日医にも災害対策本部が設置されて、日医の指導支援のもとに医師会としての救護活動が、被災地各医師会において開始され何れも行政との連携のもとに救急医療から、さらに検死にも活動を開始しました。(西宮、芦屋、尼崎、明石、津名、北、須磨など)

4. 最も被害の激しかった神戸都心部(東灘、灘、中央、長田、兵庫など)では会員の生死の消息すら確認に困難を極め、灘区ではいまだに消息不明の会員が少なくない状態です。

地域内の殆どどの医療機関が診療機能を失ってしまいましたが、その中に診療可能な会員はいち早く個人的に、あるいは被災地近隣医師会の協力を得て救急医療や検死活動に参加した会員もありました。

5. 19日には宝塚、伊丹、川西でも医師会としての救護活動が開始され、20日には神戸市医師会も神戸市医師会館に対策本部を設けて、各区医師会ごとに活発な救急援護活動を展開してきました。震災後1週間を経てから外科的な救急医療は一応ヤマを越して、30万人にも及ぶ避難所の避難市民の健康管理という内科的な救護に重点が移ってきました。これまでに民間医療機関で対応した市民の数は延べ52,436人、

その中5,634人の入院がありました。水の不足のために医療の現場では機能の発揮が著しく制約され、県外の医療機関に入院患者の転送をお願いせざるを得ない不本意な状況が続きました。

6. 外部医師会からの支援としては、日本医師会の災害対策本部が厚生省と直接協議された行政対応が次々と連絡されることが最も力づけられました。

20日には大阪に於て、近医連の常任委員会が村瀬日医会長出席のもとに開かれ、近医連災害対策本部が大阪府医師会を窓口として設置され、全国医師会よりの支援(医師派遣、救援物資、義援金など)を調整して兵庫県医師会の災害対策本部と連絡することになりました。

すでに各都道府県、各都市医師会ならびに医科大学よりの応援医師が活動して頂いております。また、日医、近医連をはじめ多数の医師会より救援物資並びに義援金も頂いております。

また入院患者の転送についても近医連、阪大病院など積極的に受入をして頂いております。

7. 行政との連携については県災害対策本部の保健環境部川村部長、後藤次長と毎日数回連絡をとって県行政の救護活動と連携をはかっています。22日には、県の設置する避難所救護センターの医療担当責任者に各地区医師会長就任を依頼されました。

国(厚生省)とは健康政策局指導課山本技官と毎日連絡をとって、厚生省現地対策本部の谷口副本部長と国、県、市、医師会活動の一本化を協議しています。

本日までの会員被害情况及び会員の救急医療活動の状況は別記のとおりです。

8. 反省をこめて

阪神間には地震は起こらない、という楽観説にとらわれていたことが、虚をつかれて対応の立ち遅れの第1原因といわねばなりません。

通信(とくに電話)、交通(鉄道、道路)などの機能が途絶してしまったことが、医師会内部の連絡と現状確認に遅れをとった第2原因と考えます。

とくに電話の不通は致命的であり、県医師会館4Fの救急情報センターの緊急電話も職員の出務不能のため、殆ど活用できなかったことは大きな誤算でした。

医療機関の機能が回復するにつれ、救急医療活動が活発になってきましたが、水・電気・ガスなどライフ・ラインの不足は大きなダメージを与えました。とくに水の不足は入院・手術・麻酔・検査などに致命的な障害となりました。医療用の水の確保が何より肝要です。

9. 今後の決意

今後は県医師会の全力をあげて再建に取り組み、

とくに被災された市民の方々の健康を守るために県内の医療機関の機能を回復して、兵庫県の医療レベルを再び全国の最先端まで高める覚悟です。と同時に被災されて自宅や診療所を失った会員並びに職員の生活擁護と再出発を支援しなくてはなりません。

以前の兵庫県医師会の輝かしい歴史を再建することを心に誓って、今後の決意といたします。

Voice 3月

阪神大震災に被災して

田辺 茂

ぐらぐらときた。すごい地震だ。ギシギシと柱がねじ切られる音、ドスンときた、横揺れは止まらない。肋骨が折られるような息ができなくなる一瞬があった。もう駄目、恐怖の一瞬。それからどうして2階から階段を降りたかは記憶にない。家内は呆然と立ち上がったところだった。着のみ着のまま外へ出る。みな寝間着姿でざわざわうろうろしていた。自宅から200m、阪急沿線すぐ南の診療所へ走った。通りの家々の外壁は崩れ落ち東方向（JR六甲辺り）は火事なのだろう、黒煙が高く舞い上がっていた。診療所の外壁は無残にはかれガスが臭うという隣近所の方が窓をこじ開けていた。ドアは表も裏も開かない。足早に自宅に戻った。電気はつかない、水は出ない、勿論ガスも出ない、所謂ライフラインは完全に断たれた。居間は戸棚のガラス破片で足の踏み場もない、あまりのひどさにただ呆れるばかり、ラジオを聞きながら片付けにかかった。指を切った。

診療所も気にかかるが入れない。隣の息子さんがひび割れの壁を打ち破ってトイレの辺りから入り、表の入口を開けてくれた。そのとき足首に怪我をし、応急処置をした。崩れ落ちた壁やガラスの破片が待合室の床をおおい、うず高く散乱していた。“先生、大丈夫でしたか”。通りかかりの人が声をかけてくれる。“市場は全滅ですよ”。“死人がでている”そんな話しかけも空耳に、ひとり懸命に壁やガラスが木っ端微塵となった破片を放り出した。ガラスには軍手よりゴルフ用の手袋がずっとよかった。83歳のお婆さんが“薬頂戴”とケロリとした顔で入ってきた。まだ調剤室まで入れる段階ではない。薬という薬は棚から落ち散乱、どうなっているのかさっぱり分からない。“今、どうにも

ならないよ”と戸惑ったが、何とかようやく探しあてて2週間分を手渡した。本や資料、FAX、テレビみんなとんだところに移動し、バラバラ減茶苦茶になっていた。

悲しかった。“人生、つまりは思い出だけ”。こんな考えで結構これまでこたわってきたものだが無残にも打ち砕かれた。もう何もいらない。情けなかった。

夕方5時頃、電気がきているのに気が付き、それからずっと夜を徹してテレビを見つけた。生々しい映像緊迫の連続で目を放すことはできなかった。

翌18日早朝、“脈がおかしい、気分が悪い”というので近所の患者さんが診療所へいった。大したことはなかった。バラバラに散乱した薬はまだ手のつけようもない。午後になって岐阜から長男が水やインスタントものをもってやってきた。交通事情もわるく危険であり“何しに来たんだ”といったら“12時間もかかって来たのに”と怒った。自宅の直ぐ北側には市の水道局があり自衛隊の災害派遣車、各県からの水道局の救援車、消防車などごった返し、まるで戦争に巻き込まれたようだった。ヘリコプターは低空をひっきりなしに飛びかい、テレビは燃え続ける火災や死者の数を刻々放映する。私はただごとではないと感じはじめた。この日も一睡もせずテレビを見つづけ夜を明かした。

地震3日目、19日、長男の加勢もあり早朝から診療所のレントゲン室から階段辺りの片付けにかかった。重いレントゲン装置も移動していた。診療所の東西の通りには三重県、岐阜県からの消防車が10台ほど並んでいた。附近の火災を想定したのだろうか。午後4時頃、9時間かかって鳥取から娘夫婦がワゴン車に救援物資をいっぱい積みこんでやってきた。電話は通じずテレビを見ていて、いたたまれ

ず来たという。そして神戸からの立ち退きを迫った。自分だけでも留まるべきと迷ったが、やむなく従うことにした。息子達はジュース、インスタント食品などを近所か上野中学校に避難している知人に配り歩いた。布引のトンネルを出るまでは地獄の底から這い出る思いだった。

あの時から早50日余りがたつ。この間、多くの方々から温かい心からのお見舞いや励ましを頂き、涙が出るほど嬉しかった。人生においてこのたびほど人の心、人の情の有難さを深く身に沁みて感じたことはない。地震関連ニュースも連日報道され被災者の手当もよくなっている。ただし壊滅的打撃をうけた診療所、家屋の撤去も一向に進ま

ず心の痛手もなかなかにおさまらない。まだ先が見えないのである。再建はいつのことになるのだろうか。

こぞかしい人間の知恵で自然や社会を征服したとする、上辺だけの経済の繁栄に酔いしれて勝手気儘に開発を進める。自然を破壊する、誇らしい海上都市にしても次々とあまりに急いで造りすぎる。あとの歪みについても考慮しているのか、少しは反省してはどうか、800年、1,000年に一度の天災だというのが、天の神さまも怒ったのだろう。阪神大震災は、天災ではない、天の戒めであり天罰だ。そう思えてならないのである。

(灘区)

「地震の朝」その後

松本憲一郎

地震の当日、私は川崎病院の心臓センターの一室で「もうすぐ検温にくる頃かな」と思いながらウツラウツラしていた時に、ドカンとベッドの上ではね上がって、3mほど離れたロッカーがとんできて右膝^{ひざ}に当たり、痛さにとび上がった。電気は一旦消えてすぐ非常発電にきり替わって点灯した。廊下へ出てみるとあちこちで棚が倒れていた。

当直の看護婦さんはすぐ患者をみて廻って変わりはないようなので、私はすぐ家へ帰ることにした。冠拡張剤のスプレーを持って絶対ゆっくり歩くことと念を押されて病院を出た。もってきていた電池式のラジオを詰所へおいてきたが大変役にたったと喜んでもらった。ゆっくり坂を下って夢野2丁目の方へ歩いた。古い家は見事に潰れていて無残だったが思ったほど凄いという感じがなく、人々は町や通りへとび出していたが比較的静かであった。木造の古い家並が多い町なのであちこち潰れていたが鉄筋のアパートなどは大体無事のようなだった。築後35年の我が診療所も外壁の一部がくずれていたが、マア何とかゆけそうであったが、室中はカルテや薬品がひっくり返って手のつけようもない。そこまで見とどけてから300mほど離れたわが家へ向かった。いつもの寝る場所にいとタンスが倒れて妻が下敷きになっていないかとそれだけが心配であったが、その夜は何か寝にくくて隣室のベッドで寝ていて下敷きになる難は免れることが出来、とにかく夫婦とも無事でよかったと喜び合った。2匹の犬も元気であったし、二男も東灘区魚崎北町のアパートからオートバイで2時間かかって帰って来た。魚崎は家を出ると近所全部潰れてすごい眺めだったという。火が出なかったのが幸いであった。

夢野一帯は山の方は全部無事で意外な感じだったが、道

一つ離れて被害がちがうのが地震の不思議で、運、不運の別れ目などというものが人間の思惑などふきとばして自然の摂理の大きさを感じさせる。

3日目から診療を再開した。体の具合がよくなく余り動けないので、菊水小学校へ連絡して何人か集めてリーダーの人につれてきてもらうことにした。「かぜ」や「下痢」が多く診療班の巡回がはじまるまで少しはお役に立てたようである。

冠動脈左前下降枝が90%つまっていたので、金沢から帰ってきた長男と加古川の病院勤務の二男の二人に診療を委かせて、2月初旬大阪成人病センターへ入院し、PTCAとDCA（冠動脈アテローム切除術）をうけた。約2時間30分ほどであったが痛くはなかったが、いささか不安だっ



たし、動脈剤入口を圧迫して19時間ほど動けなかったのは腰が痛くてまいった。すんでしまえば何事もない状態で5日目に退院し、2月15日より診療をはじめた。地震の神戸から大阪へゆくと何となく空気がちがうようで全然楽しいとも思わなかったし、病室の窓からライトアップされた大阪城が見えるのもツインビルの見えるのも空ざらしい感じで、2時間かけて神戸へ帰ってガレキの町を眺めて何とな

く心安らぐ気持ちになったのは「神戸っ子」のひがみというべきか。

地震の体験と記憶が、将来私や家族やいろいろな人にどんな影を残すかはわからないが、もう一度神戸を見直す機会になったことは事実であり、大いなる反省をこめて歴史の一頁に「阪神大震災」をしっかりと受けとめたいと思う。
(兵庫区)

Voice 4月

外国から届いた二つの見舞状

高島 裕

この度の神戸を中心とした大震災の映像ニュースは、諸外国にも大きなショックを与えたものと思われます。従って、見舞の手紙や激励の電話を、外国から受取った方も多いのではないのでしょうか。そこで、今ここに2人の外国人から届けられたお見舞状を感謝をこめて御披露したいと思います。一つはイギリス人画家、グラハム・クラーク氏から海文堂社長御夫妻宛に出された手紙で、もう一つはアメリカ人画家、ローレンス・マックアナニー氏から私宛に出された絵ハガキです。お二人共、海文堂ギャラリーで度々個展を開いておられる方々です。

January 1995

Dear MR & MRS SHIMADA

It was with the utmost dismay and sadness that we heard the news of the terrible earthquake which hit the Kansai area,

We have visited this part of Japan many times and have grown very fond of it with many happy memories... we are stunned when we think of you all who may be suffering terrible loss and sorrow, there seem no words to express our deepest sympathy.

Our hearts ache when we think about Japan, the

country and people we care about so much and we are sad that at this time we feel so powerless.

We would like to hope that we may be able to offer some practical help in the future, however small.

All we can do at this time is to pray and hope for the safety of you and your families.

Yours sincerely,

Wendy & Graham Clarke

P.S. We know you arrived back to much destruction of your lovely bookshop. We are so sorry.

W & G

Feb. 2. 95

MR.TAKASHIMA

Hello I hope you are o.k.+well. The pictures on T.V. are so bad.It has made me sad to see the people who have no homes.

Are you all right ? Thank you for beatiful calendar.

Larry McAnanyu

(兵庫区)

地域の皆様 ありがとう

仲居 久恵

平成7年1月17日午前5時46分、目はさめていました。ふとんの中からテレビをみていたところ、ドンドンドンと大きい音と共に、からだか上方にほうりあげられるような状態となり、「アッ これ何!」とっていると、テレ

ビが消えると共に、シャーと音がして同時にほこりがパイ、そしてせきが激しくでました。(天井が落下したのでしょうか。)しばらくしてせきがおさまり、すわってみると、向かいの家がみえています。「アッ地震」、家がこわれたと

はじめてわかりました。炬燵台に倒れてきたタンスが支えられ、すわれるだけの空間ができたのは、全くラッキーでした。向かいの家の窓から数人の方がこちらをみておられます。(向かいの男ばかり住んでおられるアパート) 私思わず手をふって、「元気よー」と叫びました。向かいの住人数人が庭の方に来て下さり、外から「ここからでられるぞー」と声をかけ、懐中電灯をてらして下さいました。ゴソゴソと暗闇の中、這い出ました。けがもなく、こわいとも思わず無事脱出できたのは、向いの住人のおかげでした。

わが家は全壊、周囲に残っているより倒れている家の方が多く、新開地はこれでおしまいと思いました。

震災発生から1ヶ月ほどは、これからどうしようかと迷いながらすごしました。2月も中旬をすぎた頃、某県の老人病院に就職しないかと言って下さる先生があり、私は病院まで行ってきました。帰神した翌日、30数年間、ホームドクターとしてつきあっている近くの方から、「先生、医院を再開して下さい。今仕事をやめるとボケますよ。ボケ防止のために開業をつづけた方がいいですよ。全壊の家の瓦礫のかたづけ早くできるように力を貸しますから」と電話を頂きました。又別の方からも「医院再開して、もう一度以前の顔ぶれで湊町に住もうよ」とすすめられ、湊町で

医院再開の決心がつき、医院再開にむけて行動を開始しました。3月8日には瓦礫はきれいにとりのぞかれ、更地になりました。

全壊した家からの脱出や医院再開の決心がついたのは、長年住んでいた(44年間)地域の方々のお陰と喜んでおります。医院再開後は、地域の方々のお役にたちたいと思うこのごろです。

震災後、こどもの精神的失調が心配されています。2月中旬、園医をしている幼稚園の園長先生をたずねました。「下町のこどもは、たくましいですよ。皆元気に走り回っています。精神的な症状がみられるこどもは、一人もおりません」と園長先生から御返答を頂きました。

今回の災害で水の大切さ、ありがたさを教えられました。文化的生活のもろさを味わいました。飲料水は、2日目から配給されましたが、トイレ用の水は、水道開通するまで、なやまされ、水汲みに追われました。

今回の地震で家は失いましたが、地域の方々のありがたさ、こどもはたくましく育てほしいもの、自然のおそろしさ、そして自然は大切にしなければならないこと等々、教えられました。(兵庫区)

阪神大震災を高砂市よりみて

富士原義廣

ドスンという轟音と共に、縦にゆれ横にゆられて20秒間、しばらく休んで起床する。テレビを見て阪神大震災という古今未曾有の大地震であった事に気付く。我が家は家はどうもなかったが、前後の家の屋根の棟が落ち込んでいるのが特に目立った。ひどい地震であった。

昨16日は京都の北野天満宮へ参り、風邪気味であったのがたたり、17日は脳梗塞の時でも休診しなかった私が、38度の熱で休診していた日で、テレビもよく視聴する事が出来た。

災害は次々と拡がり高速道路の倒壊や、ビルの倒壊が目立ち、死亡者が時間毎に増えて行き、倒壊せる我が家の下敷きで死亡せるあわれな人々が増えた。小中学校を始め人々が集合出来る場所は総て避難所になった。そしてそこを住居にしなければならない人々が増え、初日は食糧も自分で調達せねばならなかった。ボランティアを始め多くの同胞が欧州から、モンゴルから、いろいろの人々の善意が集められ、避難所でのお世話、死体の搬出などに当てられた。就中、次の短歌の中にある如く、自壊せる我が家より

先に、患者を施療せる医師の姿に、人の命の尊さを真先に考え、人々の健康の為に働く医師の真髓の姿をつくづく見せつけられた。避難所の生活がまだまだ続き、医師の本当の尊さが大震災により認識されたものと思われる。

避難所で肺炎になり困惑された老人、震災により持病を悪化された人々、益々この様な人々が多数出て、今こそ医療人の真の姿が見られる事でしょう。

震災を新聞、テレビで見ながら感じた短歌数種を次に掲げる。

縦ゆれも横ゆれもありて阪神の家屋倒壊またたくの間に

大地震に火災も加わり死亡せる人も多かり五千余の人

2日後も倒れし家屋の下にいて助けを求める人も多くて

名誉教授瓦礫の下で逝き給う糖尿病の権威なりしが

爆撃の後にも似たる大地震救いは空に敵機の影なく

上空に敵機なくとも地殻には断層はげしくゆり戻し始む
人間は兄弟なりと同胞の救護支援に涙こぼれる
救護物資即日積み神戸へとエンジン掛けぬライオンズの友
震災に美談もあれど悲しみの事多くして報道迷う
叫喚の中に母親見失い泣き叫びいる幼な児を見る
神戸市民強く生きよと各権威同じ言葉で励ましおりぬ
倒壊せる我が家見つめつ施療せる医師の姿の尊とかりけ

る

避難所の床に寝かされ肺炎は悪化致しぬ機器も不足し

病院の四五階潰滅す震災に四五頸椎の自壊を思わす

避難所のテントビニールに寒風は容赦致せず吹きすさび
居り

長田区に岡本に住みし同窓は無事なりと聞き胸なぜおろ
しぬ

長田区の猛火見つめつ同窓の安否気づかう藤野門下の
(高砂市)

Voice 5月

昨日の如く

柄川 武子

地震のあと紙糺まつり心足る 武子

体験はしたものの、被害の少ない立場から遠慮するつもりが、県内に住むかぎり何か書くことはあるはずといわれました。ほんの少し書くことにしました。

初めて全員に招集がかかり、集まった先生方の表情は無事を喜ぶというよりもこれからのことに、不安は隠しようもなかった。堅い表情である。

S先生の話。その時、家の外は屋根が落ち或いは傾いた家ばかり、瓦礫の下は危険と判っていても、生死を確かめるには下敷きとなっている方の脈、呼吸を診断できる位置に行った。近所の人びとと共に救けたのは6人であった。留守の医院に隣接している自宅の前に、どんどん怪我の処置を求める患者さんで自分の両親は病弱であるが無事。手当てに追われた。その中に、眠っているとしか見えない子供を抱きかかえた父親に、この子を早く診てやってと言われた。



脈なし、息なし。瞬間に死とその父に告げるのをためらった。

西外科へ行ってみなさい、うちより治療体制が整っていると思うから。こういうより他なかったと。

医師の前に人間としてのところが勝つのだとこの話を聴いて、目頭が熱くなるのを感じた。父と子の絆、次の病院へ行く少しの間にしても、希望の時間、また子の死を納得する時間、それは必要だったと確信し、S先生に労いの言葉をおかけしたのである。

S先生のお父さまは、十分な養生の出来ないまま逝かれ、ひっそり弔われたのは、それからまもなくであった。

脱線電車の大きく冬の空

西宮の自宅から神戸の灘区の診療所へは、三田回りが便利の情報が入るまで青木駅から岩屋駅間歩き抜いた。3日目の避難所への診察通いにNGOの先生の応援にその避難所をおまかせし、自分の仕事を整理する時間を持つことができた。状態の悪い患者は保健所経由で病院を確保して、救急隊が迎えにくる。仙台・熊本の救急車が記憶にある。

歩いて通り過ぎていた道にやがてバスが往復しはじめるが、徒歩の方が早い。六甲と東灘、芦屋の目を疑いたくなる風景に自然と涙が頬に流れた。

診療時間は短いのだが、往復の体力、何にも役立たないことへの腹立たしさも含めての精神状態は、大きな自然の為せる業に圧倒され続けていた。

医師会の先生方にお会いして、連帯の中にいる安心感を

感じる事ができた。

北区のI先生宅でテニスに興じることができたのは、本当に生きていてよかったと思った瞬間であった。

食器はゆっくりしてから買えばよい。収入は5分の1。
今日まで診察の度、患者さんの被災もようをきいている。

だからそれは、昨日の如くなのである。水とガスの件では近隣のご親切に預かることができた。診療所の留守中近く
のH先生に随分お世話になった。

まだまだ、昨日の如く感じている大震災。 (灘区)

V声 ICE 7月

「阪神大震災」に思う事

稲守 美紀

今回の震災に際し、大きな被害に遭われた会員の皆様においては心より御見舞申し上げます。幸い私共は、診療所は半壊の憂き目に遭ったものの、家族もスタッフも全員無事で、4月からは震災前と同じ様(でも、雨漏りはするよ)に診療出来ています。

風光明媚なこの神戸に、まさかの地震が。しかし地層学者の話では、神戸、阪神地区もいろんな活断層があるのでいつ大きな地震が起こっても不思議はなかった由。(そんな事、今の今まで知らなかった)

ここで思うのは、今回のとんでも無い出来事は、自然という名の神が文明という傘の下で驕る人間共に対し、地球の自然を破壊しつつある事への警告ではなかったのかということ。舞子や明石の地元の人たちの間ではこの地震

の直接の原因は明石大橋であると噂しています。大橋の支柱は、そのあたりでの海底の地盤の最も固い、しっかりした所に立てられたそうで、そんな所に異常な力が加えられた事によって断層に亀裂がはいったのではないかと。あの地震は起こるべくして起こったのだと言っています。なる程、震源地は明石大橋の近くの淡路島の北で、それもかなり浅い所だと聞いています。そう聞くとなんとなく説得力があり、頷づいてしましますが、いかがなものでしょう。大橋の工事が地震へどれ位の影響力があるのか、全くの門外漢の私などにわかるはずありませんが、不気味なものを感じる次第です。我々人間は、自分で自分の首を締めているのでなければよいのですが……。次の世代に一体、今何をしてやれば良いのでしょうか? (須磨区)

大震災に遭遇して

藤田 茂夫

私の家では毎年1月16日頃に床の間に飾ってある「お鏡餅」を家内が「いも餅」に作りかえる習慣があります。今年も「いも餅」を作って食卓に置いており、おまけに魔法瓶に湯まで入れてくれていました。まさかこれが翌日から役に立つとは夢にも思いませんでした。

1月17日朝、突然「ガタガタ」という大きな音と共に家が激しく震動した。同時に我が身も突き起こされる感じでハッと目が覚めた。電気は既に消え、周囲は真暗闇であった。「いつもと違う」と思わず口走ったらしいが、私には全く記憶がなかった。激しい揺れのために動けずフトンの中でじっとして地震が止むのを待つのみであった。感覚的には30秒間程であったろうか、実際には約20秒間との事であった。地震が止まってパッと起きたが、気分が悪く、吐きそうであった。横に寝ていた家内も起き出したので、

2階の娘が気になり、階段の下から呼ぶと「こわい!」といいながらも、しっかりと足取りで降りてきた。ほっとしたところで懐中電灯で居間の柱時計を見ると、幸い動いており、午前6時頃であった。いつもの如く服に着換えている間にも余震が次々と襲ってきた。スリッパを履き、懐中電灯を照らすと台所では食器棚が倒れ、食器類の大半は外に飛び出し、床はその破片が散乱し、足の踏み場もなかった。居間では東西に長い重いピアノが北側へ約30cm動いており、部屋を仕切ってある土壁には亀裂が走り、「筋カイ」が折れていた。玄関の扉の鍵はねじ切れていた。しかし何とか我が家は倒れず残った。そうこうしている中に、外が明るくなってくると、開業している尼崎市猪名寺の診療所のことが気になってきた。ここで前述の「いも餅」と湯が登場してまいります。これらでしっかりと腹

ごしらえを済ませ、さらに余分に「いも餅」を持って、いつもの午前7時20分頃、東灘区住吉台の家を家内の運転する車で出かけました。

車で住吉川に沿って南へ降り、白鶴美術館の横を通ったが、道路は南北に10m余り亀裂が走り、徐行運転で通過。住吉川から国道2号線に入る頃から車が多くなり、両側には80～60度にまで傾いた電柱もあり、両側の古い日本家屋は多数が倒れ、1階がベシヤンコになり2階が残っている家、全壊している家、壊れた残骸が歩道にまで広がっている家、火を出して燃えている家などその惨状は筆舌に尽くし難く、その傍では人が茫然とつっ立っている。国道2号線にも亀裂が走り、車は徐行運転し、車の数もさらに増えてきたが、この車の間を単車はスイスイと走り抜け、歩道は多数の人が歩いていた。

さて芦屋あたりにくると交差点の信号が点灯しているのにビックリし、芦屋川の橋を渡り、山打出の交差点を通る頃から車は遅々として進まず、モービルのガソリンスタンドを左に見る頃から歩く決心をした。国道2号線から171号線への交差点の少し手前で、JR線の車輛が脱線し、電車が土手から下へ落ちそうであった。いつもは賑わっている西宮の市場は家々が倒壊し、瓦礫が道幅をせばめていた。街頭の公衆電話は全く通じなかった。そのうちに西宮から

甲子園を過ぎ、武庫川に架っている武庫大橋を渡った。渡ると家の崩壊がほとんど見られず、何となくほっとしたことでした。国道2号線から道意線に入り、JR線立花駅をくぐり、北へ向けてさらに歩き山手幹線との交差点で何とかタクシーを拾えた。診療所へは午前11時半頃に着いた。後日この歩いた全行程を車で走破したが、10kmであった。

診療所ではカルテ棚は倒れ、カルテが散乱し、薬類も棚から落ち、薬瓶は一部床に落ちて破損し、事務所内は足の踏み場もなかった。しかし大きな被害もなく、1月17日は私より少し遅れて到着した家内や、かけつけてくれた看護婦さんと共に院内を整理した。そして翌日から朝だけ診療を始め、1月24日から平常通り診療が出来て、私自身ホッとしたことでした。また、この大地震の折、自分の家の事を顧みず、診療を手伝って下さった看護婦や事務員に対しては心からお礼を申し上げたい。同時に私自身心から感謝もしています。

今回の大震災では死者5500人、負傷者約2万5千人ともいわれ、東灘区の死者は約1500人と最も多く、その東灘区に住んでいて私も家族も五体無事でしたが、この幸運をこれからの人生で何かの役に立てたいと思う昨今です。

(尼崎市)

Voice 8月

阪神大震災の時、空の光

内田 敬止

私は、毎朝5時半起床、わずかの距離だが、出来るだけジョギングを欠かさないように努めている。持病の軽い糖尿のためである。その日はいつになく寒い朝、外に出ると真っ暗だが、街灯の光に小雪が舞っていた。いつものコースを走り、決まった団地の運動公園で、足を広げて腰の体操を始めようとしていた時であった。ドドドドーンと突然、周辺より足を震わす轟音が鳴り響いた。同時に天空の周辺が一樣に白っぽい夕焼けの様に輝き、周囲の家々の明かり、街灯が一斉に消え、低い空の輝きを背景に、運動場の周囲の家々のシルエットが小刻みに揺れていた。その時はドーンに続くザーツという夕立の音か、公園の木の葉が激しく擦り合う音がして、低い空の明るさも消え、あたり一面全く静寂、真っ暗の世界になった。その間の時間ははっきりとは分からないが、10ないし20秒ではないかと思われ、まさに天変地異が起きたと思った。

何事が起きたか、一瞬戸惑ったが、すぐにこれは予想し

ない大地震だと私には判断がついた。私の脳裏をかすめたのは、いまから50年以上前、確か中学時代、郷里の岡山県の北部にいた私は、夕方自宅の庭にいた。突然北の空がパアと赤く明るくなり、ザーという地響きとともに強い地震があり、家の石垣がグッサ、グッサと不気味な音を立てていたことであった。これは鳥取の大地震であった。私は全く偶然にこの世紀の2回の直下型地震の時の、あの不気味な空の光を見た訳で、今度のそれは、はるか50年前のそれをすぐに明確に記憶を呼び起こすものであった。後にテレビで、空の光る様子を偶然写真に撮った人がいると、その画像が映された。しかし、その写真は、場所が違うせいとか、私の印象とは光り方が全く異なるものである。しかも地震のおきる2～3分前に光ったとしているが、これは絶対にそうではない。今回は地震と同時にあり、その持続も秒単位のものである。鳥取の時もそうであったが、その時は空が光ってから轟音と共に揺れた様に記憶している。

私の住む団地は、神戸市西区で、市街の中心からみると、約20キロ程北西の山越えした、三木市に近い所である。ここで、私は、北極星を背中にして、運動場の北側にいた。したがって低い空の光りは、西南、南方向ははっきりと見たが、北側は分からない。このときに、足が震えたのは記憶しているが、振動は不思議に感じなかった。世界中が揺れている感じがであった。

直後は停電で、不気味なほど静まり返っている団地の道

大震災と生死

今村 修

いきなり激しく体を揺すられて目が覚めた。地震だ！地鳴り様の異様な音と共に、家の建て付けや家具が一斉に悲鳴をあげているかのような音を立てて、部屋全体が縦横に揺れている。並な地震ではない！一瞬身の危険を覚えてとび起きた。揺れがおさまって懐中電灯で照らすと、つい今自分が起き出したばかりの夜具の頭の位置に、タンスが引き出しを半ば出してL字型に倒れこみ、その上に置いてあった飾り棚も放り出され割れたガラスが散乱していた。家族も倒れた本棚や家具の直撃を免れていた。ともかく外へ出ようとしたがドアや窓はゆがんでどれもびくともしない。力尽くでやっと玄関のドアを押し開いて外へ出た。

割れた石段を踏み幾条もの亀裂の走った路上で隣人達と互いの無事を確認し合った。このあたりは比較的新しい一戸建ちが多く、あとで分かったことであるが埋め立て地のせいで液状化現象が起これば大多数の家が少しずつ傾いたり沈下していたのだが、この時点では見渡したところ倒壊した建物も見えず左程のものとは思わなかった。同じ芦屋市内の妻の両親も無事であることが電話で確認出来たので、誰から言うともなくまず水を確保しようと台所や浴室にやかんや鍋、ポット、バケツを動員して溜め始めたが、ほど

路を、私は夢中で家族の安否を考えながら全速力で家に向かって走った。もしや世界中で私だけが生存かとも考えた。舗装道路が割れて約30センチぐらい盛り上がっている。それを飛び越えると、今度は道路が裂けていた。ただ事ではない。わが家に飛び込むと、家族は家具の散乱した中で悲鳴とも、叫びとも分からぬ声を上げながら、手探りで灯かりを求めている最中であった。(神戸協同病院・長田区)

なく水は止まった。こうなると前夜の浴槽の残り湯が生活用水として貴重なものとなった。携帯ラジオを手元においてなかったので停電のためテレビからの情報も得られなくなった。

いつもより早めに尼崎の医院へ向かった。傾いて家屋が迫り出したり大きな亀裂のある道路を、後続車に急かされるようにして打出から国道43号線へ出た。普段より行き交う車が少ないのを訝りながら東へ向かううち、西宮市で阪神高速道の中央の太い支柱が崩れ、その先で高架道路がV字型に落ち込んでいる所に出合ひし信じられぬ思いがした。そこから国道2号線へ向きを変えたが、街はこれまでと一変してサイレンや車両等で騒然としていた。

いつもは車で30分のところ、2時間かかって医院に着いた。1階に医院のある7階建てのマンションは外見は大した被害もないように見えたが、中はレセプトコンピューターは落下し、カルテや薬類も散乱し、レントゲン撮影装置の重い付属機器や操作台、自現機等が移動していて、このあと1週間X線検査は出来なかった。

さすがに来院する患者さんはいつもより少なかったが、高熱や具合の悪い人が殆どだった。かかりつけの医院が休診のため回ってきた人や西宮市から来た人もあって、開院しているのを喜ばれた。第1日目は従業員は誰も来れなかったので1人で診療した。時々自宅や親戚などへ電話するも不通。医院にはテレビやラジオを置いてないので外界のことは何にも分からず、芦屋市中心部や神戸、西宮、北淡町で未曾有の大災害が進行中とは夢にも思わぬまま午後にはひたすら片付けに追われた。暗室の現像液と定着液が床一面にこぼれ出し、そこに上の棚の古いカルテが多数落下しているのを一冊ずつ水洗(この時点までは水道は出た)したりしたが片付けは捗らなかった。

日が暮れて帰宅の車を国道2号線へ乗り入れたが、大渋



滞で殆ど進まず。止むなく引返し自転車で2時間近くかかって帰宅した。翌日から数日間は瓦礫や段差の大きい亀裂のところは自転車を担いだりしながら通勤した。神戸、芦屋、西宮から尼崎へ避難してきた来院の患者さんの中には家族を亡くしたりした人もあったが、殆どは家が全壊しており、心身の傷の大きさやその人達の今後のことが痛い程思いやられた。

JRが芦屋駅まで開通してからは数珠繋ぎの復旧用車両の間を縫って自転車で芦屋駅へ向かったが、途中は三八通りなど倒壊家屋が多く、その中に20年余前一家でその2階に住んでいた建物があって、潰れた1、2階の上に3階部分が乗っかっているのを目にした時は息をのんだ。そこを通る度に手を合わせが、3カ月程して彼の建物が撤去され、周りに更地が広がっているのを見た時は淋しい反面、何か

しらほっとするものを覚えた。

芦屋市内の巡回診療で福岡県医療チームに同行させてもらった時のこと、茶屋之町の避難所から数軒先に、やはり以前住んでいたことのある5階建てのマンションの1階部分が潰れて4階建てになり、そこに花が供えてあるのに気付いた時、胸を突かれ言いようのない悲哀とどこに向けるともない怒りを覚えた。東京から帰ってきて数日ボランティア活動に出掛けた大学院生の長男も、ある日死体安置所になっていた所から血の付いた毛布を運び出したと衝撃を受けて帰ってきた。

人の生死を分けたものは何だったのか、単に運不運だけでは片付けられないものがある。5400名余の犠牲者のためにも、生かしてもらった我々が十分な教訓を得て今後には活かさなければあまりに申し訳ないと思う。（尼崎市）

Voice 9月

余震

寺師 義正

1月17日午前5時46分。夢寐を襲った大地震！早起きの人びとは丁度起き出したばかりの所だったそうだが、夜の遅い私達はこれからもう一眠り、むしろ目覚め前のより深い眠りの中に在った。その枕元を襲った家鳴り振動の激震に、「阪神間には地震は起こらない、誠に住み良い所だ」と思い込んで居たので、何事か？と驚き戦き、やがて地震列島の日本に住んでいて、地震は起こらない等と思っていた甘さを思い知らされると同時に、震源地は明石海峡だ、と聞いた時フト思った。

「さては明石大橋建設の為、基礎杭等を打ち込んで、ドカドカと地球を叩いて刺激を与えた所為か？」と。

しかし、いずれの新聞にもその様な事を書き立てては居ないし、一方、犬を連れての朝の散歩で、其処等中に大小の地割れ、ブロックの散乱等は見られても、遙かに望み見る明石大橋架橋のための2本の巨大な支柱は、何事も無かったように、いつもと変わらぬ姿で冬空の中に悠然と屹立している。（住居は垂水区美山台）

それでも新聞によれば1メートル数十センチずれていたとかで、架橋にはその修正の為約1ヵ月位は工期を延長するだろうが、工事続行に支障は無いとの事だ。そして最近になって架橋工事を再開して、猫走りに点灯した支柱の、夜景の写真が新聞に出ていた。

この支柱は硬い岩盤を調査してその上に設置固定した物で有り、その岩盤が僅かにずれただけとの事であった。

ところが地震発生後間も無い或日。掛け付けのお医者さんに、血圧を測定して貰いに出掛けた時、その先生曰く、「あれ（大地震）は明石海峡大橋の工事で、あの辺の地球をドカドカ叩いた所為ですよ。素人の私がこんな事を言う」と専門家たちは『何を馬鹿々々しい』と笑うでしょうが、私はそう思っています。硬い岩盤を選んで建てたと言うが、その岩盤に強い打撃を間断無く、連続して何ヵ月も与え続けられればその周辺の弱い地盤の所に影響が起こらない筈は無い。その終局がこの活断層発生となったのだと思いますよ」と力説される。

曾って私も、フトその様に思った事が有るので、深く頷いて同意を示し、「明石海峡大橋架橋工事の刺激で、地下の鯨が怒ったのですな？」と同調した。

地震発生後1ヵ月半を過ぎ様としている今日、なお誰も地震発生の原因については、言う人はいない。活断層発生によるとは言っても、その活断層を起こさせた原因に就いては、誰も未だ説明する事の出来ない天意による物であろう。明石海峡工事が原因だ、等と考える人がいるかいなか？

恐らく素人にしか考えられない事かも知れないが、未だに起きる余震は時に強く我々の不安を掻き立てて、「俺は未だ怒っているんだぞ！」と地下の鯨が、髭を振り振り吼えている様に思われてならない。（長田区）